明るく　たくましい　明世の子

ビカリア

令和６年度
瑞浪市立明世小学校
ＮＯ．１０
Ｒ６．１２．２６

「ありがとう」と言える幸せ

子どもたちが登校するとき、横断歩道の手前で停まってくれた車に向かって「ありがとうございました。」と言って頭を下げています。以前は、運転手に聞こえたか心配になるような分団もありました。今では、停まっている車５台に聞こえる声でお礼が言えています。「聞こえる声」から「思いが届く声・あいさつ」になりつつあると思います。

これは、子どもたちがビカリア委員会の活動などを通して、あいさつの声を高めてきた成果だと思います。児童玄関前であいさつをして、よい姿を放送で紹介していました。日中の廊下でも自主的にあいさつをする子もいました。また、給食の片付けをしている配膳員さんに「ありがとうございます」と声をかけてから、遊びに行く子もいます。

『「ありがとう」と言えることは幸せである』と聞いたことがあります。「ありがとう」と言う機会を得たということは、思いやりをもらえた、人とのつながりを感じることができたということです。停まってくださる、見守ってくださる方の思いやりに包まれていることを感じることができた。子どもたちに「ありがとう」と言う機会をくださる、地域の方々の思いやりが、毎日たくさんあるということです。だから、「ありがとう」が「相手に聞こえる」では不十分で、「伝わる・伝える」ことが大切だと、子どもたちには話しています。

このような地域で育った子どもたち。きっと、いろいろな場所で、思いやりを発揮する子になると思います。「ありがとう」と言う、言われる。思いやりが広がって、みんなが幸せになるといいなと思います。

一方、「人に親切にする機会を得たことに感謝したい」「ありがとうと言われることにありがとうと言いたい」とも聞きます。人のためを思って行動すること自体が、自分の気持ちを幸せにするということです。自分に温かい心があると自覚できる機会を得たことに感謝するのだと思います。

子どもたちに出会って、車を停めた。「ありがとう」と言われる、幸せな時間をつくれた。この地域の思いやりの輪をつなぐことができた。世の中に思いやりを広げるきっかけをつくれた、と思える幸せに感謝するということだと思います。地域にも世界にもいろいろな人がいます。外国籍の方も、障がいのある方も、性的少数者も。お互いに思いやりをもって接し、理解し合いながら共に暮らすことができる町なら、認知症になっても守ってもらえそうです。

全ての人が幸せになることを願い、12 月 4 日の「ひびきあい集会」で歌った「OMOIYARI の歌」（詩・曲　藤田恵美）の一部を紹介します。

「水や空気が必要なように　誰もがひとりで　生きてはゆけない　　倒れそうな人には　そっと手を差し伸べて　　OMOIYARI は　心を温めるプレゼント　　「ありがとう」って言われたら　なぜかうれしくなったよ
OMOIYARI は　世界を幸せにする魔法」